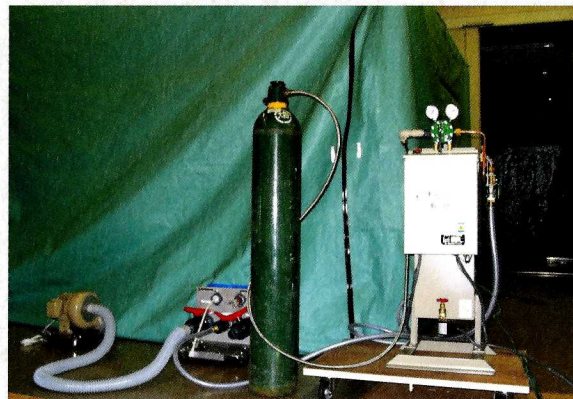


(写真1) 資料撤去前の  
展示場の様子



(写真2) 資料撤去後の  
展示場の様子



(写真3)  
二酸化炭素処理システム

コウチュウ目 (学名: Coleoptera) シバンムシ科 (学名: Anobiidae)  
タバコシバンムシ (学名: Lasioderma serricorne)

成虫は体長2.5mm内外、濃赤褐色で、全体に灰黄毛が密生し、長楕円形のかたちをしている。幼虫の体長は3.5mm内外で、やや黄味のかかった白色をしており、全体が繊細な長毛で密に覆われる。卵は食物となる乾燥した動植物質の隙間や表面に産みつけられる。世界じゅうに広く分布し、日本国内にもほぼ全土に分布している。卵は6~12日で孵化して幼虫は食物に穴をあけて入っていく。成虫の寿命は10日から15日で、このあいだ食物は一切取らず、もっぱら生殖活動をおこなう。



タバコシバンムシ  
(提供: イカリ消毒株式会社)

手法は、虫害にあいやすい資料群をあつかう民族  
(俗)系の博物館で有効な展示手法として用いられ

ることが多いことも事実である。  
展示効果と保存環境のバランス。なかなか難し

い課題ではあるが、この両立を真剣に考えて実践  
するのも博物館活動の醍醐味であろう。

民博では二〇〇七年度の冬に日本展示場の藁製  
資料に被害が発生した。資料管理を担当する職員が  
毎朝開館前におこなっている資料点検によつてま  
ず発見されたのに続き、外部委託業者による高所資  
料の点検作業でその被害が広範囲にわたっている

ことが確認された。虫糞の落ちていた資料の周辺で  
発見した成虫を採取した結果、タバコシバンムシで  
あることが判明したのである。被害状況を調べてい  
くうちに最終的には被害区域に展示してあった九  
六の資料を一時的に展示場から撤去し、処理を実  
施する事態となった(写真1、写真2)。虫害にあ  
いやすい資料が多く収蔵・展示されている民族(俗)系  
の博物館では、常にこのような虫害の危険性と隣り  
合っているのである。

博物館で虫害が発生すると、一気にその被害が  
広がる可能性がある。これは、虫害にあいやすい材質  
の資料を近接して展示したり、高所の壁面を利用  
して展示したりすることで、目の届きにくい環境  
となり、虫害の発見を遅らせてしまうことが原因  
であることが多い。皮肉なことにはこのような展示

### タバコや藁を食べる

民博では二〇〇七年度の冬に日本展示場の藁製  
資料に被害が発生した。資料管理を担当する職員が  
毎朝開館前におこなっている資料点検によつてま  
ず発見されたのに続き、外部委託業者による高所資  
料の点検作業でその被害が広範囲にわたっている

生きもの  
博物誌  
【タバコシバンムシ】

博物館の  
いたずら虫たち⑤

日高 真吾  
(ひたか しんご)

本館文化資源研究センター

って虫害を引き起こしている虫を死滅させなければ  
ならない。その方法には化学薬品製剤で殺虫処理  
をおこなう方法のほか、二酸化炭素処理法、低酸素  
濃度処理法、もしくはこのシリーズの一回目で紹介  
されたような温度処理法があげられる。このなかで、  
作業者に安全で、かつ多くの資料を一括で処理でき  
るためほかの方法と比べると有利なのが二酸化炭  
素処理法であり、タバコシバンムシの被害が出た際  
もこの方法を用いて殺虫処理をおこなった。

民博でおこなっている二酸化炭素処理法は、機  
密性の高いシートでできたテントのなかに虫害の  
発生した資料を収め、テント内の二酸化炭素濃度  
を六〇パーセントから七五パーセント程度に維持  
しながら一四日間処理をおこなうという方法(写  
真3)である。二酸化炭素処理は封入する二酸化  
炭素の濃度が重要であり、その濃度が四〇パーセ  
ント未満になっても、八〇パーセント以上になっ  
ても殺虫効果が落ちてしまう。二酸化炭素の低濃  
度はともかく、八〇パーセント以上という高濃度  
の状態が殺虫効果が落ちる原因は、二酸化炭素濃  
度が高くなりすぎると虫が呼吸をやめて仮死状態  
になり、その結果、生き残る虫がでてくるためとさ  
れている。つまり二酸化炭素処理は、虫がある程度  
活発な状態でなければその効果を発揮しないとい  
う方法なのである。